

使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われた。一同は心一つにしてソロモンの回廊に集まっていた。ほかの者は誰一人、あえてその仲間に加わろうとしなかったが、それでも、民衆は彼らを称賛していた。そして、主を信じる者が男も女もますます増えていった。ついに、人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせ、ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも誰かにかかるようにするほどになった。また、エルサレム付近の町からも、大勢の人が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まって来たが、一人残らず癒された。（使徒5：12～16）

原始エルサレム教会は、ナザレのイエスをキリストと崇める同じ信仰にあって、信者たちの心は一つに結ばれ、また、十字架で死んだ主イエスは復活して、共におられるという篤い信仰に燃えていた。集まった人々は自分たちの財産を持ち寄り、それを分かち合って不足する者は一人もいなかった。喜び、感謝、賛美の声に満ち溢れていた。使徒たちは、民衆の間で、多くのしるしと不思議な業を行い、畏れと尊敬を集め、その権威は高まる一方であった。最後の晩餐が行われた二階の広間が教会の集会場であったと思われる。また、エルサレム神殿にも行き、ソロモンの回廊でも集会を持っていた。しかし、神殿に詣でる人々は、警戒し、仲間に加わろうとはしなかった。それでも、民衆は教会のあり方に称賛を寄せて、主イエスを信じる者が、男も女もますます増えていった。エルサレムの町で、民衆から大きな注目を集める教会に成長した。著者ルカは「女も」と記述しているが、女性を無視しないルカの特徴と言えるであろう。

人々は病人を担架や床に寝かせたまま、大道りに運び出し、ペトロが通りかかると、彼の影にでもかかろうとするほどであった。マルコ福音書6章56節には、「村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、人々は病人を広場に寝かせ、せめて衣の裾にでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆、癒された」と書かれている。ペトロの場合、彼の影に触れて癒しを求められるほどであったと書かれている。また、エルサレム付近の町からも、大勢の病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まって来たが、一人残らず癒された。福音書において、主イエスの癒やしを力強く伝えているが、使徒言行録の使徒たちの癒しは、主イエスを超える奇跡であるかのように書かれている。

著者ルカは原始エルサレム教会について、二つのことを報告している。一つは、教会は信仰に燃え、理想的な教会であったことである。主イエスに信従する愛が分かち合いを可能にし、終末信仰が信者たちを無私、無欲にした。しかしこの教会も、エルサレム神殿に対する認識や、律法に対する態度で、ユダヤ人から迫害を受け、苦しむことになる。また、主イエスの再臨による終末の遅延が教会の信仰を揺るがすことにもなる。もう一つの報告は、使徒たちの癒やしの奇跡により、教会における使徒たちの権威が強力なものになっていったことである。確かに、福音書における弟子たちは、主イエスを理解できず、あらぬ野心に燃え、失敗と挫折を繰り返していたが、使徒言行録における使徒たちは別人のように一途な信仰を全うしている。それは、復活の主イエスに出会い、罪赦された者として、生まれ変わった人生を歩み始めているからである。使徒たちの福音宣教によって、ユダヤ教イエス派はパウロに受け継がれ、エルサレム崩壊後、ローマ世界にキリスト教として広がり、世界宗教となっていく。初めの原始エルサレム教会は重要な位置を占めている。